

1. みりんは堀切、秋元どちらが古いのかとのお客さんからの質問には、わかりませんとしか回答できないのか。  
同じ頃と答えて良い。
2. 二社の味、製造方法、生産高の比較表はないか。  
質問者が調査し、定例会で発表して欲しい。  
「相模屋堀切紋次郎家文書の概要」川根正教に流山村の酒造高推移表があり、幕末時は堀切紋次郎 3650 石、秋元三左衛門 1700 石、永岡三郎兵衛 1100 石とある。  
秋元家文書（慶応 4 年）には、紋次郎 3650 石、三左衛門 2000 石、次郎右衛門（嶋屋）1100 石とある。
3. 関西のみりんは黒いといわれるが運搬中の変色が原因ではないか、もともとは黒くないのではないか。  
みりんは、経時変化で色が赤くなる。製法により最初から赤いものもある。
4. 関西のみりんは雑菌が入って腐ったものと説明しているが、言い過ぎではないか。  
製法により最初から赤いものもある。
5. 二代目紋次郎が野田の高梨家の後援を得てみりんの試醸に成功し、万上みりんを開発したと聞いているが堀切家と高梨家はどのような関係か。キッコーマンと万上みりんの合併にも関係しているのか。  
みりん開発時に高梨家からの支援はあったが両家の関係は不明である。  
大正 6 年に堀切家は高梨家と姻戚関係を結び、出資を受けて万上味淋株式会社を設立した。  
同年に高梨家と茂木一族七家が野田醤油株式会社を設立。  
大正 14 年、万上味淋株式会社は、野田醤油株式会社（現キッコーマン株式会社）と合併
6. みりに焼酎を入れるのか。入れないのか。  
当時の製法では、焼酎を入れていた。入れるもの入れないもの両方あった。  
みりん製造業者は、秋元、堀切だけではなく他の地域にもあった。それぞれの家伝の製法があったので一概に言えない。
7. 流山におけるみりんの製造年月。秋元家と堀切家でみりんを開発製造販売した年代。  
流山のみりん製造については、創業時の古文書は、堀切家、秋元家共に残されていないので、製造販売年月は不明、ただし、堀切家の販売は文化 11 年（1814）に開始した。

1. 庚申待ちを3年18回行くと三尸の虫が死ぬと説明しているが、これで良いか。  
また、「守庚申を7回続ければ三尸の虫が死ぬ」と流山庚申塔探訪P6に書いてあるが、これで良いか。  
・道教では7回で三尸の虫が死ぬ。室町期の山王信仰では3年18回で3世にわたり六道に落ちないといわれている。江戸時代の流山では、行われた形跡がない。つまり、断定した回数を言わない。  
道教では7回で三尸のムシは死ぬ。室町期の庚申因縁起では道教の教えはなくなり、3年18回で3世にわたる6道の罪を消し、極楽に行けるといふ仏教の教えになる。江戸時代は時代や地域で信仰形態が変化したが、流山では回数を行った形跡はない。従って回数のこととは言わない。
2. 庚申塔を建てたのは、初めて庚申講を結んだ時とか一定の回数や期間の庚申待ちを無事終了した時に記念として建てたとの説明で良いか。  
江戸期の流山市域では、三尸や守庚申の回数は確認されていない。また信仰で信仰対象物がない信仰は、ありえないから講を結んだ時と考えられる。  
吉野家文書に「新たに庚申塔ができて、3日後？に中のお寺の方丈で供養を行った」とある。また、供養前にお参りに来た者を断った様子が書かれている。  
供養は入魂供養で、その後にしかるべき所に建立され信仰の対象になった、と考えられる。

## 閻魔堂

1. 金子市之丞を義賊として説明して良いのか。また適切な説明内容は。  
金子市之丞は、講談と歌舞伎と伝説で伝えられているが、ガイドの会としては伝説を説明するので義賊として扱う。
2. 金市義賊の根拠はなにか。文芸上の表現のみか。  
伝説に義賊としてある。根拠がないから伝説、根拠があれば史実である。
3. 閻魔堂の創建は「流山のむかし」では不明、一方閻魔堂チラシでは1776年となっている。どちらか。  
創建は江戸中期と伝わり、現在の建物は明治43年に再建したものである。
4. 流山六軒百姓の6軒とは。  
下記の通りといわれている。  
流山市史研究「近世流山村の成立」松下邦夫より：
 

(1) 平井家(平太郎)	根郷 寺(広徳寺)	墓地(閻魔堂)
(2) 平井家(敬一郎)	根郷 寺(広徳寺)	墓地(閻魔堂)
(3) 須藤家(勲)	根郷 寺(常与寺)	墓地(常与寺)
(4) 石川家(与吉)	西平井 寺(常与寺)	墓地(常与寺)
(5) 寺田家(英一)	根郷 寺(光明院)	墓地(閻魔堂)
(6) 某(不明)	加	

 ( ) 内の名前は松下邦夫氏が調査した時の当主の名前である。